○議長（中村　敦）　次は、質問順位６番、１、消滅可能性自治体を脱却するために、２、ごみ対策の未来を問う、３、命を守る防災に向けて。

以上３件について、５番　長友くに議員。

〔５番　長友くに議員登壇〕

○５番（長友くに）　緑のしもだの長友でございます。議長の御指名によりこれから一般質問をさせていただきます。

もう皆さん御存じのことと思いますが、４月24日、人口戦略会議は消滅可能性自治体を公表しました。その中に静岡県の９自治体が当てはまっていました。伊豆半島に集中しており、定住人口や若年女性人口を増やす取組を急ぐ必要があるということです。この事態に対して、下田市ではどのような判断をし、どのような対応を取るおつもりかお聞きしたいと思います。

そもそも何でこのような消滅可能性自治体になったのか。それはどういうことなのかと考えてみたときに、まず、最近の市内の古くから営業していたお花屋さんとか家具屋さん、これが相次いで廃業するこういう寂しい事態になっています。これらはどのような経緯で廃業するに至ったのか、市側は把握しておられるのでしょうか。また、看板や建物内のトイレなどの老朽化も目立ちます。看板がさびついて、あるいは建物の中の壁紙が剥がれてボロボロ、こういうものを新たにしようという動きが見えないように思います。これに対してどのような支援策を取ってこられたのか、お聞きしたいと思います。

また、４日の日に下岡蓮杖の顕彰祭があったんですけれども、その帰りに半田屋さんで加畑嶺さんというピアニストの演奏会があったんです。たまたま通りかかってその演奏を聞くことができたんですが、これを事前にほかの情報手段によって手に入れることができない、つまり知らなかったわけで、このようにまちの中の人がいろいろ頑張ってらっしゃるのを応援できないものかと思ったんですが、このような情報を把握して発信する、そのようなことも必要ではないかと思うんですが、そういうことに対する何か手だてはお持ちでしょうか。

また、人口減少、これが大変なことになっているということはもう皆さん既に御存じだと思います。でも具体的にどのように大変なのか、それが私はいまいち実感できなかったわけなので、「行政区別・年齢別人口調べ」というのを市民課に教えていただきました。

私がこれこれと頼まなかったために１年間にわたる膨大な量のこういう人口調べのここでいいんですか、どこかに映りますか。こういう人口調べの表をいただきまして、これだとあまりに茫漠として分かりにくいので、令和５年３月31日と令和６年３月31日、この資料から15歳から39歳までの女性、この人数をまず抽出してみました。炎上しちゃうといけないので

これがどのような年齢かということは申し上げませんけれども、下田市１丁目34人、２丁目22人、３丁目29人、４丁目24人、５丁目22人、６丁目は多少多くて180人、これがどのような数なのかということをちょっと対比させるために60歳から84までの女性の人数を勘定してみました。１丁目が185人、２丁目が129人、３丁目が108人、４丁目が66人、５丁目75人、６丁目402人。この数字を見てもお分かりと思いますけれども、よくて３倍、５倍、あるいは十何倍、14倍というような、例えば、下大沢なんかでは14倍という差のあることが分かります。つまり今元気に働いている世代ともう支援が多少必要と思われる世代の差がこんなに開いてしまってるわけです。これは昨日今日こうなったわけではなくて、議員さんたちに聞くともうそんなこと分かり切ったことだとおっしゃるんですけれども、やはりこの数というのは非常に大変な人数ではないかと思います。生まれたばかりのゼロ歳の人数を見てみても、１丁目の男の子はゼロ４歳までが３人、女の子は６人、そして２丁目では、やはり男の子は４人、女の子は２人、こういうふうに非常に少ない人数しか生まれていない。こういうことが一目で分かってしまうわけです。

このような若年層、ことに女性人口の減少に歯止めをかけるには若い女性の暮らしやすいまちづくりが大事かと思いますが、どのような方策を取っておられるでしょうか。女性が市外に出ていかなくても済むような、例えば高卒後の学業や職業訓練の手だて、また就業支援はどうなっているのか。安定した生活を送るための社会保障はどうなっているのか、お伺いしたいと思います。

若い人が、派遣社員にしかなれないというようなことでは安定して家庭を持ち子育てを営んでいく、そういうことができにくくなるんではないかというわけです。さらに子供が生まれた後、子育てしやすいような施策はどういうものを考えて実施されているのかお伺いしたいと思います。

例えば、若いお母さん同士の交流の場づくり、つまり結婚して子供が生まれたけど誰とも話し合う場がないというような声も聞きました。もちろん市としても対策は取っておられるんでしょうけれども、改めてこういう手だてを取っていく必要があるのではないかと思いお聞きいたします。

そして、開国下田みなとの子供たちの子供広場のところを見ましたら、子供服のリサイクルをしていまして、ここにはお父さんも来ておられて、ただ、こういうのをどこでやってんのか分かんないことが多いんだよねとかと言ってらっしゃったので、このような子供服のリサイクル、子供というのは本当に１、２か月で大きくなってしまって、服が着れなくなる。

そしてまた新しいのを買ってもすぐに着れなくなるということが多いのは皆さん御存じのとおりで、こういうあんまり使われてないけれども捨てるには惜しいけれどもという子供服を交換する、そういう場所というものを幾つか市民に分かる形で提供していくということが必要ではないでしょうか。

大体子供服を売ってる店というのがこの下田のまちの中にはない、山越えて買いに行かなきゃいけないんですよという声も聞きました。

そしてもう一つ、私も子育ての経験があるもので一番困ったのは、急に用事ができた、急に叔母が危篤になって行きたいけれども子供どうしよう、あるいは今日は美容院に行きたいけれどもちょっと２時間でいいから子供を見てくれる人いないかなという、そういう思うことがたくさんあったんですが、こういう短期の保育の需要にどのような対策を取っておられるのか。このような短期保育を担う方は何人ぐらいいて、そしてお母さん方が利用しやすいようなシステムはできているのかどうかということをお聞きしたいと思います。

また、下田に人口を増やすためには市外からたくさんの人に来ていただくということも一つの方策ではないかと思います。下田にはたくさんの「宝物」があります。「消滅危険性自治体」になっているのなどは信じられません。下田には、胸いっぱい吸い込めるきれいなおいしい空気がありますし、日々色を変える広々とした海、新緑輝く山、下田小学校校歌にうたわれている今村伝四郎や下岡蓮杖、中根東里、この間、下岡蓮杖顕彰記念祭で慰霊祭で、下田小学校の生徒の皆さんが歌を、下田小学校校歌を歌われましたけれども、このように下田から出て活躍した人、下田に来て活躍した人、そういう歴史上の人物、たくさんの歴史上の人物を下田は輩出し、関連を持っています。開国のときの土岐丹波守とか川路聖謨といった方々の活躍は皆さん耳にしておられると思います。

また、歴史だけではなく、春先にはウグイスが鳴き、今は特許許可局という聞きなしで有名なホトトギスがあちこちで鳴いております。奈良時代からいろいろ短歌に万葉集なんかにうたわれてきたホトトギスがこのまちの上を鳴き渡っているわけです。

それから雉や山鳥などの固有種がおり、サンコウチョウも河内なんかには飛来しているようです。あと、イソヒヨドリ、この間、澤村邸で行われた野鳥の写真展では、うちのそばで青い羽したすごい立派な鳥が飛んでるんだけど、あれは何だろうねと聞いてた人がいましたけれども、それは多分イソヒヨドリではないかと思います。非常にきれいな声で鳴く鳥がいます。

このような自然豊かなところで、そして海で捕れる魚や貝、近隣の農作物のおいしさは言

うまでもありません。このように自然環境においても、歴史においても食料においても、多くの「資産」を持っている下田は、市外の人の耳目を引きつける、観光ばかりでなく定住先としても輝かしいまちではないでしょうか。それを生かした施策は種々考えられると思います。「開国１７０年」に当たって、もっともっと有効利用すべきと思いますが、いかがでしょうか。

次に、一般質問書のＢ、ゴミ対策の未来を問うということをお聞きしたいと思います。

下田市では、住民に反対の声があるにもかかわらず、中学校や認定こども園、プールや運動場のある文教地域に１市３町の広域ごみ焼却場をつくろうとしています。

これに対して、これをちょっと映していただけますか。もう皆さん、御存じだと思いますけれども、つまり南伊豆町ではごみの処理の不能時に委託をするということで、「オリックス資源循環」という埼玉県の寄居町にある企業に年間1,000トンのごみを運び込むという契約を結んだ、委託したということが３月26日の伊豆新聞に載っていました。このオリックス資源循環というところは、ごみを分解してしまう、水と資源に分解して残渣を残さないという処理方法をしているそうです。ここまで運ぶのは大変ですが、長野県の小布施というところにあるＥ－Ｓｔａｇｅという運搬会社がこれを引き受けているということが報道されております。

また、西伊豆町は４月18日の新聞に脱炭素、災害対策強化で東電と協定を結んでカーボンニュートラルの実現に向けた包括的な連携協力に関する協定を締結したという記事が出ています。2050年までに温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指し、木質バイオマス発電や災害対策に取り組むということです。そして、何よりも下田市では上下水道課が中心になって地域バイオマス資源活用についてという、こういう試みをやっておられます。バイオマスって何かというとそこの画面にも出ておりますけれども、バイオマス燃料を利用した発電方式のことで、直接燃焼方式、ガス管方式等があります。上下水道課では下水道汚泥、し尿浄化槽汚泥、食品廃棄物、木質廃材などの有機残渣を嫌気性微生物の力を利用して発酵させ、メタンガスを生成し、そのガスを利用して発電することを検討していきますということで、１市３町の広域ごみ処理焼却場では、先ほども質問の中にありましたが750トンを超えるような汚泥を燃やしてしまう。この上下水道課が検証してるような、こういう活用方法によれば、電気発電ができるという、そういう資源となり得るものをみすみすと燃やしてしまう。燃やして灰にしてしまう。こういうことが許されるのかどうか、日本は経済成長と浮かれてたときには、もう何でもぼんぼん燃せばいい、2000年頃には世界中の焼却炉の半分が日本にあった

わけです。ほかの国では、紙はもう徹底的に再利用する。そして、ほかの生ごみなんかも徹底的に肥料化したり豚などの餌にしたりして残さない。こういうことを世界の国ではやってきました。日本もこの不況下、非常に劣化してしまった国を立て直すためには、ばんばん燃して資源を灰にしていくという方向ではなく、資源を有効活用して、そして対策を取って人々の力にしていく、そういう方向に方向転換しなければ国が成り立たないというそういう時代に来ているのではないでしょうか。

そういうわけで、市民の一層の努力と再資源化これを工夫していかなければならないのではないかと思います。私もキエーロを非常に優れものとして去年冬になるまでは利用してきたんですけれども、冬になったら全然分解しなくなってしまってしばらくの間休んでたんですが、また始めて、いや、困ったなと思ったのは台所のごみですね。玉ねぎの皮とかジャガイモの皮、枝豆のかす、こういうものは非常に分解が難しいわけです。ですから、生ごみの入れ物を２つ用意して、こっちは庭のコンポスト、こっちはキエーロと分けなきゃいけなくて、これがひと手間だなというのがちょっと残念なんですが、あと、竹パウダーの肥料化のところ、これはいろんな方が試して非常に有効であるということをこのように、こういうふうにエッセイを寄せてくださってる方があります。

このようないろんな方法がせっかくこの下田市で始まっているわけです。燃しちゃう。しかもこの費用が、去年の３月いきなり100億が133億、その前の令和３年の計画では、50億ぐらいだったのは、ばんばんばんと値上がりして、おまけに公設民営で民営の費用が20年で120億、合わせて300億に達しようという、これを先ほど御紹介したどんどん少なくなっていく下田の人たちに背負わせていいものかどうかということ、このことをもう一度深く考えていただければありがたいと思います。

そして、３番目に「命を守る防災」に向けてという質問をさせていただきたいと思います。

私、４月22日と23日に、幕張本郷の市民アカデミーで行われた研修に参加させていただきました。エッフェル姉ちゃんとかいう人が研修に行ったけど報告出してないとか言って叩かれてましたけれども、私も研修に行かせていただいた以上、何か報告しなければと思って有浦隆さんという方の過去に学ぶ災害対応と自治体防災ということを聞いてきたことの報告をさせていただきたいと思います。

ほかの方のレッスンも非常に詳しく報告があったんですけれども、聞くほうとしてはずっと立派な御講演を聞くよりも15分に一回ぐらいえへへみたいな、わははははみたいなそういう講演を聴くほうが非常に身についたというか、記憶に残ったというわけです。

この有浦という方は、熊本県の初代危機管理防災企画監という仕事をなさって、熊本大震災のときにもいち早く災害対応をしたということで、そのお話を面白くしていただきました。何しろいろんな災害対策、災害を未然に防止し、被害の拡大を防ぎ、その復旧を図ること、こういうことを考え出したのは誰でしょうかと言って、皆さんを見回して、それは私です、えっへんというふうな感じでみんなを笑わせながら講義を進めていって、本当に分かりやすいことでした。

この方の一つの大きなテーマです。まず、指揮台というものをつくるということです。ここに指揮台のありさまが写真で掲載されておりますけれども、まず地図、地図を開きそして状況をスタンプをポストイットみたいなのにスタンプを貼ってここは重要、こうしようとか、それからここに住民を避難させよう。そしてこの防災用品はこことここに配備しよう。そしていろんな被災地支援の物資が届いたらこれはこことこことここに分配しよう、こういうことを指揮官という仕事の方、つまり防災リーダーをつくってそれがてきぱきと指示する。そのためには事前に訓練をしておかなきゃいけないわけです。

今、このまちでも毎年９月とか12月に防災地震対策、津波対策とかの集まりがありますけれども、だんだんマンネリ化して中には集まって点呼して終わりみたいなところも出ていると聞きます。そうじゃなくて、もう南海トラフいつ起きても分からない喫緊の課題ですし、能登は１月１日に震災があって、また５月の末にまたあって、これがいつ崩壊したのか分かんないというような状態ですので、こういう発災時に誰が誰を誘導し避難所をどことどこに開設し、送られてきた援助物資をどう配分するか、素早い対応が求められます。そんなことを考えなくても何とかなるだろうという時代ではありません。こういう皆が被災してもおかしくない時代にあって、もう一度防災対策を練るということが必要ではないかと思います。

以上、一般質問をさせていただきました。よろしくお願いします。

○議長（中村　敦）　質問者にお尋ねします。

ここで休憩したいと思いますが、よろしいでしょうか。

２時20分まで休憩します。

午後２時15分休憩

午後２時25分再開

○議長（中村　敦）　休憩を閉じ会議を再開いたします。

当局の答弁を求めます。

企画課長。

○企画課長（鈴木浩之）　それでは、まず消滅可能性自治体の概要、全体像について企画課のほうから御説明いたします。

消滅可能性自治体につきましては、有識者会議でつくります人口戦略会議が実施をした全国1,729自治体の持続可能性分析結果によるものでございます。

下田市は2014年発表に引き続きまして今回2024発表におきましても、消滅可能性自治体として分類がされたところでございます。

今回の判定では、特に20歳から39歳の女性人口が2020年から2050年までの30年間で50％以上減少する自治体という区分をされておりまして、下田市は人口変化率が55.8％の減少となっているものでございます。しかし、下田市の人口変化率を見ますと、前回2014年発表で59.9％だった減少率が2024発表におきましては、55.8％と4.1ポイント改善を示しております。人口減少局面であることには変わりはございませんが、子育て支援、教育環境の充実、移住・定住促進、産業振興等各種施策を進めてきた成果が少し現れているのかなというふうに考えております。

今後につきましても、議員御質問にありましたとおり、本市が持つ様々な資源、資産、魅力を生かしたまちづくりを進めていくことが重要であると考えております。

今回、下田市が進めておりますグローカルＣＩＴＹプロジェクトもその一つであると考えております。国際性と地域性という本市が持つ２つの特性を生かし、様々なチャレンジを進めることで国際性と地域性を併せ持ったグローカル人材の育成とともに開国の歴史に基づく国際性豊かな自然、歴史、文化等、ほかにはない地域の特色を生かした魅力的なまちづくりを実践してまいりたいと考えております。

私のほうからは以上でございます。

○議長（中村　敦）　産業振興課長。

○産業振興課長（糸賀　浩）　私からは、消滅可能性自治体を脱却するためにという御質問の中の産業振興課の部分についてお答えを申し上げます。

まず、店舗等が廃業に至った経緯についての御質問でございます。

廃業につきましては、商工会議所の資料によりますと高齢によるものが大部分を占めているという状況でございます。

次に、店舗のトイレなどの改修支援についてお答え申し上げます。

令和２年度から４年度にかけ新型コロナ対策の補助金により22件のトイレ改修支援を、さらに空き店舗等活用事業補助金により新店舗の創業支援を行っており、令和４年度に８件、令和５年度11件と数多くの新しいチャレンジにもつながっております。今後も商工会議所等の意見を伺いながら、さらなる取組について検討をしてまいります。

次に、就業支援についてお答え申し上げます。

就業支援につきましては、若年層への就業支援として、地域の仕事や多様な働き方を知ることを目的とした下田高校南伊豆分校のインターンシップや下田中学校の総合学習など、教育機関や地域事業者と連携した取組を進めております。今後も引き続き教育機関と連携し、共同教育並びにキャリア形成を支援してまいります。

以上でございます。

○議長（中村　敦）　福祉事務所長。

○福祉事務所長（芹澤直人）　私のほうからは、子育て支援の御質問のうち、所管する施策についてお答えをいたします。

福祉事務所では、これまでに子育ての不安解消のため相談体制の強化といたしまして、こんにちは赤ちゃん訪問の実施や子供家庭総合支援拠点を設置し、幅広い年齢層の児童がいる家庭の相談援助に努めてまいりました。また、子育て世代の経済的支援の強化といたしまして、子供の医療費助成や国交付金を活用した給付金事業のほか、中学校への就学準備の給付金、さらには独り親家庭の生活安定を図るため、小学校入学時のランドセル等の購入や社会保険の保険給付対象となる医療費の自己負担分を全額補助するそういった助成などを進めてまいりました。

子供の健やかな成長のためにも子育て当事者が経済的な不安や孤立感を抱いたりすることなく、安心して子供と向き合える環境を整えることは重要であることから、今後も子育ての当事者や子供たちからの意見聴取、また、対話を重ねて子育て支援の充実に努めてまいります。

交流の場づくりといたしましては、市民ボランティア団体と連携をした下田わくわくパーク「これば！」や社会福祉協議会によるひよこサロンを開催し、保護者同士の情報交換や子育てのベテランスタッフとの交流を通じて、日常の子育ての忙しさから一息つける憩いの場ともなっております。

子供服のリサイクルにつきましては、下田わくわくパーク「これば！」の会場の中で学用品や子供服のお譲り会が行われてきました。しかしながら、まだまだこうした取組への支援

の拡充が求められておりますので、今後も各団体と対話を進め、必要な施策を講じるとともに取組の普及啓発及びＰＲに努めてまいります。

以上でございます。

○議長（中村　敦）　学校教育課長。

○学校教育課長（平川博巳）　私からも子育て支援についてお答えいたします。

多様な子育てニーズに対応できるよう学校教育課では保育環境及び子育て支援拠点の充実に努めているところです。

具体的には、生後７か月から小学校６年生まで切れ目のない子供の居場所の確保に努め、保育所、こども園、放課後児童クラブの管理運営支援を行っております。

議員御指摘の短期、緊急時の保育については、緊急一時保育事業、ファミリーサポートセンター事業、病児保育事業という制度により対応するとともに、子育て支援センターを活用し、子育て相談や本就園親子の居場所、交流の場を提供しています。今年度もこども・子育て支援事業計画の策定に合わせアンケートを行い、保育に関するニーズ調査を整理して子育てしやすい環境整備を進めてまいります。

以上です。

○議長（中村　敦）　市民保健課長。

○市民保健課長（吉田康敏）　私のほうからは人口減少対策から子育て支援策に係る部分についてお答えさせていただきます。

市民保健課における主な人口減少対策として、不妊治療助成の拡充を行ってきたところです。平成29年４月に従来の治療助成額、年10万円から治療助成額の拡充と交通費の追加を行い、最大35万円に拡充したところ、平成29年度以降７年間で延べ79組の御夫婦が助成を受け治療に取り組まれました。

子育て支援につきましては、平成30年度から子育て世代包括支援センターを設置し、妊産婦及び子育て家庭が抱える母子保健、育児等に関する様々な悩みなどに円滑に対応し、妊娠期から子育て期までの切れ目のない支援を行ってまいりました。

特に、令和４年度から出産・子育て応援の伴走型支援として、以前から実施してきた妊娠初期からの妊婦支援、新生児訪問をさらに重点的に対応し、母子手帳交付時の面談、新生児訪問時の面談の機会に各５万円ずつの出産子育て応援金の手続を進め、直接会って関わることを大切にしております。特にサポートが必要な対象者には複数回訪問するなど、産前産後ケアに努めております。

令和６年度におきましては、小児救急医療の前段階となるＳＮＳによる健康相談に取り組む予定で、発熱やけが等の相談ができるＳＮＳによるチャット形式のアプリ導入を６歳以下の子供のいる世帯対象に向けて調整中です。今後も子育て世帯が不安を感じることのないよう支援してまいります。

以上です。

○議長（中村　敦）　環境対策課長。

○環境対策課長（鈴木　諭）　それでは、私からは２点目、ごみ対策の未来を問うということで、下田市のごみの対策についてのお伺いがございましたのでお答えを申し上げます。

下田市は、第２次環境基本計画におきまして４Ｒの推進、ごみの適正な処理を重点事項に掲げ、リフューズ、リデュース、リユース、リサイクルの４Ｒの取組の実践によるごみの減量化、排出抑制を推進しております。

キエーロによる生ごみ削減の普及促進や雑紙回収による紙ごみの資源化、生ごみの水切り徹底等既存の施策のほか、広域ごみ処理施設の供用開始に合わせまして容器包装プラスチック類の資源化についても準備を進めております。また、お話がありましたバイオマスの発電の検討の中では、生ごみあるいは浄化槽汚泥の荷重についても検討を進めているところでございます。

今年度、一般廃棄物処理基本計画の見直しを実施している中で、ごみの減量目標や発生抑止、資源化の施策について長期的な視点に立った計画の改定作業を進めていきたいというふうに考えております。

以上です。

○議長（中村　敦）　防災安全課長。

○防災安全課長（土屋武義）　私からは質問の３番目でございます命を守る防災に向けてという中で、下田市も毎年防災訓練をしておりますが、形骸化しているところが多いのではないかという御質問につきましてお答えいたします。

地域の防災訓練の内容につきましては、各自主防災会ごとに訓練内容を検討し、実施していただいております。地域の防災リーダーである各地区の自主防災会長との連携を強化し、実効性のある訓練を実施いただけるよう、今後も参考となる訓練内容の情報提供を行ってまいります。また、県と連携し、サテライト防災センター制度を活用した自主防災組織向けの研修等の実施を検討してまいります。

続きまして、南海トラフ地震が近づいているという今、命を守る防災のためにどういう備

えをしておくべきか、お尋ねしたいとの御質問でございますが、まず、自助という観点からでございますが、早期避難、これが重要になります。市では、令和４年度、５年度で全戸配布させていただきました私の避難計画を活用し、どこへ、どのルートで、いつのタイミングで避難するのかを各御家庭で平時の段階から備えていただきたいと考えております。また、御自宅に避難生活に必要と予想される食料品や防災用品を備蓄することも重要なことです。

次に、共助の観点でございますが、発災時には多くの人の助け合いが必要となります。平時から地域の自主防災会の活動へ積極的に御参加いただき、防災訓練等の機会に自分は何ができるのかなど、地域における自身の役割を確認し合うことも大事なことです。ともに助け合う共助について学び、備えていただきたいと考えております。

最後に、公助の観点でございますが、市といたしましては災害対策本部体制の強化のため訓練を実施し、体制を見直しを行うとともに、備蓄品、備蓄食糧の継続的な整備、配置の見直しを含め、災害対応力の向上を進めてまいります。

以上でございます。

○議長（中村　敦）　５番　長友議員。

○５番（長友くに）　各担当の方から非常に懇切丁寧なお返事をいただきありがとうございました。

もう皆さんには分かり切ったことを尋ねたと思われるかもしれませんが、常に見返してそしてこのまちの消滅というような事態にならないような活気あるまちづくりにお互いに力を合わせて進んでいけたらと思います。

そして、いろいろ子育てのこともお伺いいたしましたけれども、その根底にあるのは何かといいますとやはり思いやりの心、慈愛の心ではないかと思います。今日、間に合わなかったんですが私、緑のしもだという小冊子を出してまして今度の６号で中根東里について前田實先生という方も３年前に亡くなられたそうですが、その方の文章を転載させていただいております。

それを読むと、中根東里という方は御自分の著作をほとんど記憶して捨ててしまってただ１冊新しい瓦、新瓦という教訓書を残されたということです。この新瓦というのは、どういうあれかというともう私たちの世代でもほとんど関心がないかもしれないけど、中国の古代から詩経という本が伝わっておりまして、その中には、小雅の一文である詩があります。その内容を大意を言いますと、女の子が生まれたら土の上に寝かせなさい。おもちゃは瓦を与えなさいというものなんです。今の人から見たらびっくりするような話ではないかと思いま

すが、中根東里はこれを引いて姪の芳子さんという人への教訓にしたわけです。何でそんなことを言うかというと、つまり、瓦をおもちゃにするということはこれは私の考えですが、瓦というものを手に取った場合に、これは子供にとってはおままごともお皿にもなり、あるいはお餅にもなり、空想力を働かせてそしていかようにもそれから考えを導き出すことができる。つまり想像力を育てるということが大事ではないかということを中根東里は書き残されたんではないかと思います。中根東里の言葉というのは、そのお弟子さんたちによって書き残されていたものが多くて、私もこれからそれについて勉強させていただきたいと思っておりますけれども、このように中根東里は３歳で預かった姪御さんの将来を思ってこういうものを残されたと思います。中根東里が学んだのは室鳩巣とか荻生徂徠といった朱子学の方から陽明学、王陽明が解きだしたものを分かりやすくまちの人たちに伝えたということで名前が残ってるわけですけれども、これはどういうことを言ってるかというと、学問をするのは何のためかと言ったら、仁をなすため、仁というのはにんべんに二と書きます。今の学問は、これ、ここでいい学歴つければお金がたくさんもうかったり、いい就職先が見つかったり、出世できる、そういう利に走る、そういうことが表だってしまっているのではないかと思いますが、そうではない、学問をするのは仁つまり人を思いやり、人を助け合うというそういうことを目指したということではないかと思います。

振り返って今のこの下田のまちを見ますと、子供の未来、子供の命、子供の健康について、これを第一に考えるという方はいらっしゃるのでしょうか。今、市のお２人市長に立候補されていますけれども、子供たちの育つ文教地域においてばい煙を出し、パッカー車の排気ガスがもうもうとするような、そういうごみ焼却施設を文教地区に建てるという、こういう情けない施策を堂々と掲げておられる方がこのまちの振興、まちのにぎわいの基をつくっていかれるのかどうか、私は非常に疑問に思います。

子供の命第一、そして、にぎわいをつくるのは、子供の命あってこそではないかと思います。このような市の在り方、私は大きな疑問を感じざるを得ません。きっぱりとごみ焼却場の計画を諦めていく。そういう施策というものが必要ではないかと思います。もし、このお２人ともがごみ焼却場を強行されるということなら、私は去年、市議という身分を頂戴して応援してくださった方からとんでもないことだから思いとどまるようにと何度も言われましたが、この状態を見て、身を挺してこのまちの方向を決めていく立場に立ちたいと思います。これは質問ではありませんので、すみません、質問の時間をお借りして決意を述べさせていただいて申し訳ない。もう10日しかないから、これどうするか分かりませんけれども、どう

なるか。もうとにかくそういうやむにやまれぬ思いでこの場に立っております。

以上で、質問を終わります。

○議長（中村　敦）　これをもって、５番　長友くに議員の一般質問を終わります。

それでは、ここで13番　江田邦明議員より発言を求められておりますので、これを許可いたします。

13番　江田邦明議員。

○13番（江田邦明）　昨日６月５日の私の一般質問、新しい観光についてで字句の誤りを訂正いたしたくお願い申し上げます。

海水浴場条例及び公の施設に関係する再質問の中で、ぜひとも、この海の活用について新しい市長さんも伊豆の海のポテンシャル、ビーチのポテンシャルには言及しておりましたので要望いただければと思いますと発言させていただきましたが、新しい市長さんは誤りで、新しい知事さんが正しく、訂正し、おわび申し上げます。

以上でございます。

○議長（中村　敦）　以上で、本日の日程は全部終了いたしました。

これをもって散会いたします。

明日、本会議を午前10時から開催いたしますので、御参集のほどよろしくお願い申し上げます。

お疲れさまでした。

午後２時48分散会